

慢性腎臓病 とは

慢性腎臓病（CKD）とは腎機能の低下（約60%未満）、もしくは検尿（蛋白尿、血尿）や超音波（結石や形態的異常）などの検査異常が3ヶ月以上続く状態です。現在、日本には約1330万人のCKD患者さん（成人の8人に1人）がいると言われており、あらたな国民病として注目されています。また、CKDでは心臓病や脳卒中などの心血管疾患になり易いことが明らかとなっており、CKDを治療して、いかに心血管疾患を予防するかが社会的課題となっています。

◆慢性腎臓病の原因

CKDの原因には慢性腎炎、糖尿病、高血圧による動脈硬化などがあります。特に最近では生活習慣やメタボリック症候群と関連して糖尿病からのCKD患者さんが増えています。CKDは病期によって1～5期に分けられていて、早期（1～2期）には症状はほとんどありませんが、症状が出現する時期（4～5期）になると腎機能を回復することが困難となります。

◆検診の励行と専門医の受診を

慢性腎臓病は検診での検尿や血液検査（血清クレアチニン）のチェックによって診断されます。慢性腎炎の中で最も多いといわれるIgA腎症では早期の治療によつて根治が得られ、また他の原因による場合でも早期の治療により病期を進行させないことが可能です。腎機能が既に低下している場合には、食事療法や薬物療法によつて残された腎機能を

長持ちさせることが大切です。検診での異常を指摘された場合には、精密検査と早期の専門医の受診をお勧めします。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

医学博士 安永親生